

「日本国憲法が創り出した価値」

井上ひさし／作家

○七年十一月二十一日 所沢ミュージズで行われた 主催「井上ひさし講演を成功させる会」での井上ひさし氏講演要旨（文責・「マスコミ九条の会」ホームページ編集部）

オリンピック最終予選のサウジアラビア戦をあきらめて、集まっていた皆さまとてありがとうございます。

今日は、つまり憲法を「守る」「守る」と言っているうちに、実はもう国民投票法まで決まって、うまいチャンスがあれば憲法改正を国民投票にかけられるところまで、退いてしまっています。

軍人密度が世界で一番高い国 日本

軍人密度という考え方があります。人口当たり軍人が何人いるかということを経済統計に出して、どの国が一番軍事が厚く、堅くなっているかという、統計の方法があります。これによりまず日本は世界で一番、軍人密度が高いのですね。つまり人口との関係で、軍人が一番多い国になりました。二十五万人の自衛隊、そして五万人のアメリカ軍、あわせると三十万人です。

一億二千万のところ三十万の軍隊がいる。はっきりいって自衛隊は軍隊ですから。

今一番兵隊さんの多い国は中国です。二三〇万人。でも中国は十三億の人口がありますから、それを割り算したりして比べますと、日本の方がわずかに上回って、世界一の軍人密度国なんです。

ですから、「憲法を守れ」「平和を守れ」と言っているうちに、実は、既成事実の方がどんどん進行して、今や世界で一番軍人の多い、兵隊の多い国になってしまっているわけです。

簡単に言いますと、「守れ」「守れ」と言っているうちに、崖っぷちから落っこちてしまえますよ。「守れ」といっている間は、どんなにうまく守つても、現状を守るといのが精一杯で、少し油断するとちよつと引つ込む。その連続で、結局ここまで来てしまった。

いったいどうすれば良いかということ、この頃考えるようになりました。

その考えを今日は少しまとめ、こういう『国際条約集』（有斐閣刊 ○七年版 二八〇〇円＋税）というものを調べたり、考えたり、学者の先生にうかがったりして、もう一つ前へ進む方法をお話したいと思います。

平和を守れとか九条を守れといっているばかりでは、狡賢い人たちがどんどん現状を変えてきていますから、負けながら「守れ」「守れ」といっている状態というものを、皆さんもお感じになつておられると思います。ですから、そこから盛り返すために、皆さんのお知恵を借り、力を借りて、この九条の会も「守れ」といつてなにか講演会をやると、「あ、これで守った」と、それでは守っていないので、もう一つ前へ進むにはどうしたら良いかということを考えて来ましたので、それを後半にお話ししたいと思います。

本邦初演ですのうまく行くかどうか。それから、「九条の会」の皆さんと相談して、「俺、こういうこと言うよ」というのではなくて、一昨日頃から考え始めたこととお話します。

この「守りましょう！」と言っているだけでは、ちよつとこちらも空しいんですね。実際、リアルな現実はそのままで来てください。

日本は、世界第3位の軍事予算を使っている国です。でも、その軍事予算を良く調べると、なんか滅茶苦茶ですよ。

ホバークラフト、普通民間で買えば二十億のものを六十億で買っているとか。それから、海上自衛隊の給油問題もあります。が、八十万トンだかなんか、あれどこから買ったと思いますか？ バーレーンの石油会社から買っています。海上自衛隊の給油艦

がバーレーンから石油を買ってインド洋で、皆さんご存知の展開となつておられるわけです。この売り手の石油会社の経営者は誰だと思えますか？ あのライス国務長官とチェイニー副大統領ですからね。しかも三倍で日本が買うわけです。これはアメリカの高官から買っているのと同じですよ。それをタダであげているわけです。こんな滅茶苦茶な金を使って、国を守るわけがないですよ。私たちを守ってくれるなんて大嘘で、それは旧満州でソ連が侵攻してきたときの関東軍の動き、そういうのを見ていけばもうすぐ分ります。関東軍はだーっと朝鮮半島の付け根まで退却して、中にいる一二〇万の日本人たちは見殺しです。どうも私たちは軍隊があれば自分たちを守ってくれるという幻想があるようで、その辺も後半にお話しします。

それでは、日本国憲法はどういう働きをしているかということとです。

僕が体験したのではイタリア半島の、イタリア半島っていうのは長靴をはいている人の足の形をしているとよく言いますよね。その足のつま先の先にシチリア島があり、これはボールの形をしています。そして膝頭の反対の方、膝の後の方に、小さな人口五万のサン・マリノという小さな国家があります。ここは軍備を持っていない。世界で今、国連加盟国が二〇〇近くありますが、世界で非武装、軍隊をもっていない国が二十五カ国あります。そのうちのひとつです。

そこのあるレストランに行ったら、日本国憲法の前文と第九条が日本語で小さい額にして飾ってあるのです。日本では武力を捨て、戦争も捨てている。武力を捨ててというのは嘘ですけど、そのレストランのおやしさんはそう信じているわけです。憲法で戦争を放棄して頑張っている、ああいう国があるのをわれわれはどれだけ誇りに思っているか。あんなに大きな国が丸腰で生きていくんだから、私たちのような小さな国も当然だと。それにイタリアの中にありますからね、先輩として大先達として尊敬しているのだというレストランのおやしさんがいまして、そういうところまで日本国憲法は入り込んでいるというのを身を持って実感して、非常に嬉しく思ったことがあります。

それから、日本国憲法がこれまでどういう仕事をしてきたか、つまり価値ですね。日本人が知らない、気がついていない日本国憲法の仕事を総ざらいしてみます。

「憲法」前文が世界の非核化条約成立の水先案内

「南極条約」に活かされた憲法前文

一九五七年から二年間、皆さんご存知のように国際地球観測年というのがありました。戦後初めて各国の科学者たちが力をあわせて南極を探検しようと、国際地球観測年という2年間を決めました。日本はようやく独立しまして、国際的な集まりに初めて科学の分野で参加することになりました。私たち年をと

ったものは、「宗谷」という南極探検船を良く覚えていたのですが、つまり覚えていたというのは、やっと日本もオリンピックやその他国際的な催しに一人前として参加できたという感動がありました、よく覚えていたのです。そのときに実は国際地球観測年が壊れそうになったことがあるのです。

それは、ソ連とアメリカが互いに相手の出方を疑ったことによるのです。ソ連側は、アメリカは国際地球観測年にかこつけて、南極に観測基地と同時に軍事基地を作ってしまうのではないかと疑い、アメリカもソ連を疑ったのです。ソ連はああいうわけの分らない国なので、国際地球観測年にかこつけて軍事基地を作るのではないか。これだけなら良かったのです。そこにイギリスが入ってきて、いや、もともと南極はイギリスの探検家が最初に発見したところなので、これはイギリスの領土だ、と言い出したのです。

そのようなことでこの観測年が壊れそうになったときに、やはり日本も国際社会に復帰して気合が入っていたとみえて、ちよっと待つて欲しい、と。せつかく初めてわれわれ科学者たちが力をあわせて探検船を出してやろうとしているのに、いろいろな事情で壊れては困る。私たちは日本国憲法というのを持っているのだけれど、ここには「あらゆる諸国民が互いを信頼し」という前文にあることを示したのです。だから疑うのは止めましょうと、騙されてもいいからお互い相手を信じたらどうですか、ということを珍しく言い出しましてね。それで半年ぐ

らいしているいろいろな交渉が行われて、実際に南極観測というのが始まったわけです。

そのときにアメリカとソ連とイギリスが、日本に感心するのですね。感心して、その信頼した約束を法律にしようと、法的にそこを日本が言い出したようにしようというので、有名な「南極条約」（一九六一年六月効力発生）というのを作ります。「南極条約」は本当に短い国際法です。

南極はどここの領土でもない。これは人類のための領土である。あらゆる人々の国である。というのが一つと、ここには軍事基地は絶対に誰も作ってはいけない、と。しかし、科学観測はみんな競争しようではないか。こういう内容を参加した7ヶ国がお互いに認め合って、署名して、国会も批准して、「南極条約」というものが発足するのです。これが始まりで、いろいろな国際条約が結ばれていくわけです。

日本国憲法にも第九十八条ですか、これは憲法をまとめた、福島の「九条の会」の方が下さったのでいつも持って歩くのですが、日本国憲法第九十八条の第2項です。「日本国が締結した条約及び確立された国際法規は、これを誠実に遵守することを必要とする。」と、憲法で決めてあるのです。

日本国は、特に国民の代理人として国会に集まっている政治家、それから国家公務員は、日本が外国と締結した条約と国際

法をしっかりと守る、というのが憲法の定めるところです。ですから、この「南極条約」が出来たことで、国際法が一つ出来た。これを政府は守らなければならぬわけです。われわれが憲法の上で政府に守れと命令しているわけですから。

それからこの「南極条約」の次に出来たのは、中米・南米の三十三カ国ですか、そこが、「ラテン・アメリカ核兵器禁止条約」（一九八六年効力発生）を作ります。

この「ラテン・アメリカ核兵器禁止条約」というのは、中米・南米においては核兵器を作らない、どこからも持ち込ませない、もちろん使わないという、三つのことをみんな申し合わせたものです。

申し合わせるだけですと核保有国が勝手に攻めてきますから、核保有国にこの条約に入った国々が、つまり条約機構が議定書というのを送るわけです。それで約束させるわけです。われわれはこういう約束をしたので、あなた方はここで核を使わないで欲しい、使ったら国際社会に訴える、という約束をお互いに交わす。

こういう「ラテン・アメリカ核兵器禁止条約」が続いて出来ます。

同時に海底もやろうじゃないかというので、海底は今、非核

兵器地帯なんです。これも条約で、正式にいいますと「海底非核化条約」(一九七二年効力発生)といっています。これも日本国は署名して批准していますから守らなければならぬですね。

次に、南太平洋の辺りが、ほとんど毎月のようにイギリスとフランスによって核実験がおこなわれた時代がありますね。あそこには十三くらいの小さい国がありまして、実験をしたければ自分の国でやれと、いうことになるわけです。それは当然ですよね。そこで、この南太平洋の帯ではいっさいの核、核実験はもちろんのこと、核兵器を作らない、作る力は無いかもしれませんね。小さな、本当に人口三万とか十万という島国ですから。作らない、それから持ち込まない、使わせない、核実験もさせないという「南太平洋非核地帯条約」(一九八六年効力発生)というのを結びます。これは「南極条約」が、日本国憲法を示されて、揉めていた人たちがそれを読んで、なるほどなと思つて、そうしないとこれから先に進まないというので受け入れたのですけれども、この「海底非核化条約」も「南太平洋非核地帯条約」も、これは日本国憲法の前文を一部引用しているのです。ですから日本国憲法が水先案内になって、核実験などで悩んでいる国々をまとめていったわけです。

持っていた核を廃棄した国、南アフリカ共和国

さらに今度はアフリカ大陸。あそこもフランスが砂漠で核実験をやったんです。フランス領が多いですから。フランスは南太平洋を締め出されて核実験場がない。やはり自分の国ではや

らないのですね、パリの真ん中でなんかとてもやれない、それからプロバンスなんていうところでもとてもやれないですから自分たちのかつての植民地だったところでやるわけです。それでアフリカの国々、あそこに二十くらい国があるのですけれども、その国々がまとまって「アフリカ非核兵器地帯条約」というのを、これを批准している国としていない国があり、今はまだ全部ではないのですけれども、条約を作った。そこにも核兵器はいっさい持ち込ませない、それから使わないという約束をしたわけです。

今度ワールドカップがある南アフリカ共和国、あそこは実は世界六番目の核保有国だったので。この、「ベルリンダバ条約」、「アフリカ非核兵器地帯条約」というのは署名されたのが一九九六年ですから、もうすでに世界六番目の核保有国だった南アフリカ共和国では国民投票をするのです。

つまり、アフリカ大陸と運命をとにもするか、アフリカ大陸の国々と一緒に生きていくためにはその条約に入るべきか、それとも入らずにやはり核を保持して自分を守るか、ということを国民投票をした結果、やはりわれわれはアフリカの一員であるというので核を廃棄、これだった一つですね。これまでの世界史の中で、核を持つていながら廃棄した国はたった一つ、南アフリカ共和国です。

ですから、あそこでワールドカップがあるというので、これ

はぜひ行かなくちゃと思うわけですよ。そんな国、いまだかつて無いですから。持っていたのに廃棄したという国はあの国一つです。

それから、「バンコック条約」（一九九七年効力発生）というのも結ばれています。これは東南アジアの国々は全部、今、非核兵器地帯なのですね。

すべての条約の中に、日本国憲法の、特に前文です。前文は石原慎太郎先生、それから三島由紀夫先生が悪文だといっている。僕は全くそうは思わないですよ。あんな論理的な文章はないと思っています。でも、あれが邪魔な人はあれが悪文だといえます。ケチを、隣の嫁さんにケチをつけるときに、性格なんかよりも顔つきが気に食わないとか、僕はそういうふうな言いがかりだと思う、僕から見るとそう見えますね。悪文だから駄目だと。悪文でも中身がよければいいじゃないかと、お前もそうだろうと、石原さんには特に聞きたいのですけれど。

それはともかくとして、「バンコック条約」で東南アジアの国々も非核兵器地帯になることをおたがい約束しあった。

これらの条約は全部、日本国憲法の流れであり、かつ、議定書というのを核保有国と取り交わして、使わせないようにしているわけです。

日本では肝心の日本国憲法は邪険にされて、押しつけだの、時代は変わったのだのと冷たくされていますが、日本国憲法は本当に健全な孝行息子ですよ。自分を生みの親たちが嫌っているわけです。しかし、あれは鬼っ子だとか、勘当して別の息子を取ろうなんていっている間も文句もいわずに、ずーっと、見えない仕事をしています。

今、「宇宙条約」（一九六七年効力発生）というのが締結されています。もちろんこれには国連加盟国はほとんど入っていますが、宇宙空間、大気圏を抜けるとそこからはもう非核兵器地帯です。レーガン大統領がすごいミサイルを作って、何とか計画というのをやったときに、どうしても宇宙空間に核兵器を積んだミサイルが出てしまうのです。するとこれは条約違反なので国際社会の批判がやはり怖いというので、長距離を飛ばすミサイルをあきらめたというくらい、国際条約というのは本当に年とともに強固になってきているわけです。ですから宇宙空間も今は非核兵器地帯なんです。

それを変えようという動きが今ちよつとあります。宇宙ステーションを作るにつれてアメリカ、そして日本はその尻尾について、宇宙条約を変えようという動きも密かにあります。宇宙ステーションといたら人間の夢が広がるなんていっている場合じゃなくて、あれは明らかにもし軍事目的に使われるようになったら、直に弾を打ち込んでくるというのではなくて、戦争の準備のために観察、偵察、いろいろなことで写したものを解

析するとかそういうことに使われるとしたら、その結果、核兵器などを使われたら、これは宇宙条約違反になるかもしれないので、今一生懸命変えようとしているのです。

僕は部屋の中に小さな地球儀を置いてあって、条約のところを全部塗っていくと、南半球はみごとに全部、核兵器を使えない地帯になっています。揉めているのはほんの北半球の一部のところですよ。石油が出る所とアメリカです。

ドルの信頼がなくなったアメリカの焦り

アメリカ、あの、アメリカの悩みは分るんですね。イラクがなぜ攻撃されたかといいますと、大量兵器は無かったでしょう。最初に攻撃するとき、ブッシュは大量破壊兵器を作って隠しているというので攻め込んだわけです。ところがだんだん時間が経つと真相が現れてきます。実はイラクは世界第2の産油国ですが、石油をドル建てではなくユーロ建てにしようとしたのですね。ドルは世界の基軸通貨とよく言います。

これはアメリカにとって非常に有利です。たとえば私たちの、こまつ座という劇団があります。ここが日本のお札を印刷できるということになったら、こんなに便利なことはない。赤字になったらコピー機なんかで刷りやあいんですから。そしてそれを使えば損はいつさい現れないわけです。

だからアメリカはドルを守るのが第一なんです。ドルを世界の基軸通貨にしよう。ところが有力な産油国が、いやドルでは売り買いたくない、ユーロでやりたい、と言ってサウジアラビアとイランを誘ったわけです。イランとサウジアラビアは一時イラクに同調した。で、石油は全部ユーロ建てになった。ところがアメリカの脅しにあつて落ちたのが、サウジアラビア。ドル建てに戻ったんです。今サウジアラビアは石油をドル建てで取引を行っていますが、イラクとイランはユーロでしています。

この頃ドルの状況を皆さんご覧になれば、アメリカがいかに弱くなったか…。

もしドル建てで石油が売り買いできていけば、あの、サブプライムローンというのがあるでしょう、あの問題も隠せたかもしれないのです。カバーできたかもしれない。

つまり、みんながドルを信用しなくなった。結局ヨーロッパ連合体の共同で発行するお金の方が信頼できるわけです。だからああいうのがぼこぼこ現れてきて、ドルを今まで通り印刷して買わせることが出来なくなったのです。

アメリカがもしイラク、イランから石油を買う場合は、お札を刷ってドルで買えばいいのですが、それができなくなったというところで、なんとかドル建てに戻そうというのが、イラク攻撃の本当の原因だった。アメリカがイラクを叩いた原因という

ことが、時間が経つとだんだんと誰もがわかってくるわけです。

先人の英知が受け継がれた憲法前文

国際法の網が南半球を覆う

ちよつと、話を戻しますと、今、地球儀を見て南半球、海底、南極、北極これは国際共同管理です。それから宇宙空間すべて、核兵器を使えないという空間になっているわけです。それを切り開いたのが、実は日本国憲法です。

この本（「国際条約集」）には今申し上げた条約が全部入っています。それらを綿密に読みますと、日本国憲法の特に前文です。前文の匂いが、あるいは語句が、あるいは一節が、うまく取り入れられて、現在まで至っているわけです。

じゃ、日本国憲法の前文というのはどういうことかといいますが、皆さんもよくご存知ですが、この中にはアメリカの独立宣言も入ってあればフランスの人権宣言も入っています。それからイギリスのマグナカルタも入っていますし、世界の人間たちが戦って手に入れた力が、権利が、いろいろな形でこの前文に入っています。

そして九条。これは古い話で、世界平和ということをやジャン・ジャック・ルソーからカントとずーっと続いている哲学者たち

が考えてきたことです。

日本でもご存知のように、幕末の横井小楠という福井藩の政治顧問がいますけれど、この人はもう完全に世界政府を作らないとだめだ、と。まだ明治になる前ですよ。それから一番有名な人は植木枝盛、そういった人たちがみんな、いわゆる今の国際連合よりもちよつと強力なものを作らないと、つまり国家の主権の上に立つものをお互いに作り合わないと駄目ではないかと、もう明治の前ぐらいから、特に明治時代にしきりに言っていました。

日本人であれば誰であろうが、人間である限り必ず誰かの命令で人を殺しに行く、誰かの命令で人に殺される、そういうのはもうごめんだと。それはもう15世紀よりも前からいからずつと言われていた。日本では特に幕末に大きくなった流れで、押しつけでもなんでもありません。そういう地下水のようにあったもの、私の運命は私が決めるのだ、他人が決めるのではないという、これは基本的人権ですが、それがずつと養われてきた。

それが、もちろん前文に、もうちよつと平たく言いますと平和的生存権という平和に生きる権利が誰にでもあるのだということが全部盛り込まれているものですから、これをやはりみんな手本にするのです。

サン・マリノのレストランのおやじさんも、日本国憲法を実は師と仰いでいるわけです。店の方針にしているのかどうかは分かりません。そのレストランのおやじさんは実は、サン・マリノの議員なんです。国会議員ですよ。国会議員もボランテイアでタダなんです。実費だけです。早く辞めたいと言っていましたけれども。

そう考えますと、日本国憲法というのは、私たちは別として、あれが邪魔な人たちが邪険にしたのにもめげず、あちこちで素晴らしい仕事をしている。今、現在進行形ですね。

実は、モンゴルと北朝鮮と韓国と日本の間で、北アジア非核兵器地帯構想というのが起きていたのです。北朝鮮のああいふ動きで、それから日本はいろいろと渋って、それは今一時期ぼしゃっています。けれども、その中でモンゴル一国だけですけども、非核兵器地帯を名乗って、今そうなっています。ですから地球儀の南半分では全部核兵器は使えない、北半球ではモンゴルがそうなんです。

だから、僕は朝青龍を鼻肩にしているわけです。偉い国から来た人だと思って。

十三歳や十四歳で、言葉も食べ物もぜんぜん違う国へやってきて、そして四国の高校に入って日本語を覚え、日本の食べものに慣れようとしながら稽古をして、二十何歳かで横綱になった

わけです。それに対して品格をと言ってもちよつと無理ですよね。外国人ですし、何しろ裸で出てくるのですからね。あれはスポーツであり、日本の伝統芸能という二つの部分があります。国技となったのは明治以降です。

一人横綱でがんばっているとみんな感謝していたのに、もう一人横綱が出たらいきなり冷たくして、あることないこと書き立てる。それは巡業をさぼったのだけ罰すればいいのです。横綱のくせに巡業をさぼっちゃだめじゃないですか、と。でも、僕から見ると北半球でたった一つ、非核兵器地帯になった国から来た人が、裸で丸腰で戦っているというのは、これを支援せざるを得ないですよ。

日本国憲法というのは、私たちが知らない間に、実はそれは人間のさまざまな願いや智恵や獲得したものの塊なので、それはどんなに国柄は変わっても、これいいね、ということ、それを使いながら国際法が次々に出来て、国際法の綱が南半球を覆い、これからは北半球です。

ヨーロッパ共同体の動きに注目

今討論しているのはヨーロッパ共同体です。EUにはフランスとイギリスの問題があります。これは核保有国ですから問題がありますけれども、ひよつとしたら・・・。

つまりお札を発行する権利、国民国家というのはまずお札を発行する権利が国家主権です。自分の国といわれるところへ同じ通貨を流す、それから同じ言葉になる、標準語を定める、それから軍隊を持つ、これが近代国民国家の三大条件です。その国家の主権の三つのうちの一つをお互いに供託しあったわけですね。それは使わない。貨幣発行権というのは最高の国家主権ですけれども、つまり国民の権利ですけれども、それはあきらめると。お互いにそれは欧州共同体に預ける、というふうに、主権を預けるという実験を始めたわけです。

歴史も近いですし、言葉も二系統が分かれたという感じで近いですから、まとまる可能性は最初から高かったとはいいいながらも、誰も信じてはいなかったのです。

戦後、ヨーロッパが立ち直るときに、フランスは鉄が欲しい、西ドイツは石炭が欲しい、その両方の気持ちをフランスの外務大臣ロベール・シューマンがまとめ、一九五二年に「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」を設立しました。フランスがどんどん石炭をドイツに供給する、ドイツはどんどん鉄鋼を作る。それでヨーロッパが復興していく。そういうところが始まりで、それから延々石炭と鉄だけの共同体だったものがさまざまなことを足しながら、揉めたり揺れたりしながら現在に至っています。大事なことはそういうことを実際にやり始めている国が今、同時代としてあるということです。

それから、今、南半球では核兵器は使わないことになっている。使おうもないということになっている。いつの間にかそうなったのではなくて、みんなが日本国憲法に盛られた精神を、日本国憲法を、特に前文を参考にしながら、いろいろな苦勞をしてそこまでこぎ着けているわけです。

ですから私たちの道は二つではないですね。平和か戦争か、という二つではなくて別の道が見えているわけです。

第3回 ハーグ平和会議の目標

いつも何か空しいんですね。「守る」「守る」といっているうちに、最初に言いましたように軍人密度世界一の国に、実は気がつくとなっている。何を守ったのだろう。これはなんとか考えなければだめだなど思っているうちに、私は、それを高校時代に見て感動したのですが、ロッセリーニの「無防備都市」という映画をDVDで、たまたま見たのです。五年くらい前で、そして、「無防備都市」ってなんだろうと思って調べ始めました。

当時、ハーグの陸戦協定というのがあります。ハーグというところはいつも平和会議をたくさんやっています。一八五〇年代から、つまり今から一六〇年前ぐらいからハーグの熱心な活動家たちがいて、戦争はやはりむごいから、こういうことはやっちゃいけないとか、いろいろなことをいって、結局、退却

するときに井戸に青酸カリを入れてはいけなとか生物兵器を使つてはいけなとか、毒ガスを作つてはいけなとか、それから職業軍人が殺しあうのはこれはしようがないけれども、一般市民を軍隊は絶対には殺してはいけない、ということをやハーグの人たちが一生懸命議論しているうちに、あそこに自然にハーグ平和会議というものが生まれたのです。

これは一八九九年が第1回です。ここで一気に退却する際、青酸カリを井戸に、つまり負けた方が退却するときに攻めてきた奴らをやつつけるために、井戸という井戸に全部毒を入れて退却するわけですよ。そういうことはいけない。それから毒ガスもいけないということを決めて、第2回が一九〇七年、十年後です。ここでまたさまざまな規則が決まっていって、それが国際法になっていくんですね。

第3回は一九九七年ですか、今から十年前。だから一九〇七年の第2回から、3回目まで九十年も空いちやったわけですよ。つまり二十世紀は戦争の時代で、平和会議を開く暇が無かったのです。それで、ソ連が崩壊してロシアになって、鉄のカーテンも解けて西ドイツと東ドイツが一つになったあたりで、それからヨーロッパ共同体の動きもあるのですが、もう一度考えよう、やっと3回目が開かれた。

そのときにこれは有名な話ですが、行動計画の一番トップに、二十一世紀の行動、つまりこのハーグ平和会議の目標は、

世界各国の憲法が日本の第九条を取り込むという運動を21世紀にかけてやつていこうというのを、そのハーグの平和会議で決めた。ここは国際法を作る民間の機関です。非常に権威があつて、そこで決めたことは次に全部国際法になっていきます。

もう退けない現実、一歩でも前へ進める実効ある運動を

つまり日本国憲法というのは一人歩きしながら、いろんなところを組織していつているわけです。でも、本家本元の日本において、実は自衛隊というような言葉でわれわれみんな知らん振りして、見て見ぬふりをしていきますけれども、実はもう紛れもない軍隊である。兵器は全部アメリカのお下がりですけど、でも、それを普通の値段の2倍3倍で買っているわけですが、お金も世界では3番目ぐらいに多く使っているという軍隊が現にある。

この現実をどうするかっていうことを、実は突きつけられていると僕は考えています。「守れ」「守れ」といつているうちにこうなったということは、結局、負けて負けて、負け続けたのではないかと。

「守れ」から、運動は「する」の方へ切り替える

そこで、折角こういう九条の会が、今七〇〇〇になんなんと

しています。四国では自民党の町会議員がつくった「自民党町議九条の会」というのがあるそうです。これ、共産党やどこでも関係が無い。取り上げるのが「赤旗」ばかりですのでいかにも共産党の組織みたいに見えています。このように自民党から公明党の人からも、とにかく九条を守りたいという人が党派を超えて、いろいろなところでいろいろな九条の会をやっているわけですね。それがもう七〇〇〇ある。

われわれ小田実さん、大江さんを中心に、加藤周一さんたちと話し合ったときに、会則を作るのをよそう、会長も置くのをよそう、それからお金を取るのもよそうということにしました。今日、お金を取ったんですよ。いや、これは別です。本部といわれる呼びかけ人が、お金を扱うのはよそうと。これ、必ずやられるんですね。政府側がこういう組織が邪魔になったときに、必ず金から調べ始める。そこで僕がうっかり所沢へ来る運賃を、水増し請求なんかすると、そこから突っ込まれていつて駄目になります。

会費を集めない、それから規則を作らない、会長を置かない、組織のない組織にしようということ、各地に出来る九条の会が全部世界の中心でいいという、だからこれはもう捕まえないですよ。どんな悪いことをされても、へこたれるような数ではもうなくなってしまうからね。自民党の人たちも社民党の人たちもみんなあちこちで作っています。

そこで、守れ守れと言っている。これはこれで素晴らしいのですけれども、六十二年間言っている間に、ここまで来てしまったのはどういふことか。

もうちよつと整理してみますと、消極的だったんじゃないかと思うのです。

つまり戦争しない、戦力を持たない、交戦権を持たない、というふうには全部すべて何々しないという否定形なんですね。私たち日本人というのは否定形が好きですから。ここに入るべからず、と否定で言います。芝生に入らないくださいと否定でお願いする。遊ぶときは公園の横の広場で遊びましょうというふうには、勧める形ではなかなか言えない。廊下を走るな、とすぐ否定形で命令をしますけれども、走るときは運動場を走りなさい、廊下は歩きなさいというふうには肯定形で言えない民族なんです。

というのは、常に否定形で、「反対！」といっているのは消極的なんですね。つまり何かが起きたら反対はするけれども自分で何かを作らないというきらいが、どうも僕自身にもあります。これは日本の運動のすべてに、「何とかを許すなー！」といっているうちに、「許すもんか」というふうにはやはり押されてくる。

これは日本語の問題ですかね。一度、大野晋先生に相談したら、ウーン、ちよつと考えますといわれて、ものすごく真面目

な先生ですからね。僕も忘れていたら、三カ月目ぐらいに、結論ができました、と返事をくださいました。確かに、するなするなというのは日本人の癖だけれども、万葉とかその前の古事記とか日本書紀を調べると、そんなに否定形は無いので、つまり日本人が国家というものを作ったときに、国家からこれするなあれするなというのがずっと積み重なってきた。これ詳しく大野先生のお手紙を紹介すればいいのですが、今日探したのですけれどもどっか行っちゃったんですよ。

ですからこれから積極的な平和主義というのは、「する」というほうへ切り替えなければだめですね。じゃあ、何ができるかと考えて、この「無防備都市」という映画を見て、そうか、無防備都市というのが昔あったんだと。そこでハーグをまず調べて、ハーグの陸戦協定とかハーグの条約を、これは、捕虜はこういうふうには扱わなくてはいけないとか、全部ハーグの条約にあります。ハーグの平和会議が中心になって作って国際法になったものです。そうしたら確かに規定がありました。

その都市が、われわれは戦わない、戦う意思が無い、それからここは文化財が非常にたくさんある、といったときには、すべて自国の兵隊さんを全部その町から出てもらって市民だけにする。大砲も何も隠していないということを中立国というのがありますから、中立国に査察してもらって認めてもらう。そうすればそこは無防備都市という、これを攻めたら国際犯罪になるわけですよ。

パリもそうでした。ナチス・ドイツが攻めて来るのですけれどもパリは無防備都市ですから、ナチス・ドイツはむなしく靴音高く入ってくるだけで、フランス人はわーっと迎えながらレジスタンスを始めるわけですよ。

それからローマもそうです。その無防備都市という映画の舞台になったローマも、たくさんローマ時代からの遺跡がありますし、ここは無防備都市を宣言したのです。ですからナチス・ドイツも攻め込んだ連合軍も、あそこでは鉄砲を撃つたり出来ない。後半、ちよつと問題は起きましたけれども。

それから3番目がマニラですね。マニラも無防備都市をハーグの協定に基づいて宣言しました。

昭和になって国際法を学ばなくなった日本の軍隊

ところが日本は国際法を一時期から全然勉強しなくなってしまうました。明治時代は、日本は国際法が一番詳しい、一番勉強する、国際法を勉強するなら日本の勉強をしろというほど、明治の学者たち、政治家も国際法をうんと研究したのです。やはりちよつと奢りが入ってから、今のアメリカと同じです。俺が国際法だとなるのです。俺のやることに国際法といえども、文句をつけるな。だから支那事変、中国との戦争というのは、これは国際法では必ず宣戦布告をしなければならぬのに、あ

これは事変でずっと処理しようとするわけでしょう。他の理由もありません。

ですから昭和になってから、まったく日本の軍隊は国際法を将校たちに教えていないのです。だから捕虜になったときに困るのですよね。

ソ連に抑留された六十五万人の旧満州国にいた人たちは、この間亡くなった瀬島龍三という人は関東軍の高級参謀でした。昭和二十年八月十九日に極東赤軍、つまりソ連軍と関東軍の司令官同士が会うわけです。日本は負けていますから、敗戦国として会う。山田乙三という関東軍の総司令官はソ連が攻め込んだとき大連で芸者を上げて大騒ぎをしていたのですけれど、あわてて帰ってきて、それで交渉に行く。僕は山田乙三さんには何の恨みもないのですけれどね、だいたいそういうものなんです。守屋次官といい、偉い人ってみんなにかゴルフをやっているか当時は芸者遊びやっているかどっちかです、なんの不思議もないのですが。

八月十九日、こちら側の参謀と向こう側の参謀も同席します。そのとき日本側は、本当はソ連も悪いのですが、日本は「この兵隊たちは捕虜である、だから捕虜として待遇して欲しい」ということを実は極東赤軍側にはつきりと主張しないとイケないんです。負けようが勝とうが、捕虜というのは一つの身分です。国際法で捕虜を扱う方法が全部書いてありますから、この捕虜

をこういう待遇にしろと、ちゃんと要求しなければいけないのです。

でも、皆さんご存知のように実は関東軍は根こそぎ動員です。本当の関東軍は沖縄やフィリピンにもう出てしまっていて、ここにいる関東軍は実はその年の四月と七月に急遽満州から集められた、昨日までは事務員といった普通の人たちです。だから体も鍛えていないし寒さにも弱いしというので、たいへんな悲劇が起きました。

もし日本軍が国際法を知っていて、つまり法務将校というのがいて、これが日本に昔はいたのですけれどもなくなったのです。必ず国際法を良く勉強している法務を司る将校が部隊についていて、あらゆる戦闘を国際法に基づいてやっています。ところが、日本にはそれが無かったわけですから、それは南京大事件も起こるかもしれません。このときにも法務将校がいまないので、参謀だけでした。それでも特に瀬島は主席参謀ですから「捕虜として待遇せよ」と要求しなければならなかったのです。それから将校には将校の待遇があります。将校を労働させてはいけないとか、全部決まっているのです。ですから、国際法を勉強していなかったというのは、日本軍の手落ちだったと思うのです。

その、国際法の知識のない日本軍は無防備都市のマニラを攻めたわけですね。

山下奉文さんがフィリピンで死刑になったのは、いろいろな罪状の中にそれがあるのです。つまり無防備都市宣言したマニラを攻撃した責任というのが、実は日本軍に生じていた。国際法を勉強していなかったからそれが判らない。その罪で裁かれて、他でも捕虜を虐待とかいろいろあります。捕虜虐待、これも国際法にあります。捕虜の扱い方が書いてあります。

第一次世界大戦のときに、ドイツ軍の捕虜が日本にやってきて徳島などにいました。捕虜になった兵隊さんが帰りたくなくて、それで神戸でお菓子屋さんをやったり、ローマイヤーになったりで、国際法を勉強して、捕虜を丁寧扱っていた時代もあったのです。

でもやっぱり傲慢になったらいけないですよ。人も国家も傲慢になると俺が国際法だというふうにとどこかでそういう気持ちが出て、相手がいるということをおぼえてしまう。で、マニラは日本軍が攻撃してしましまして、その罪で日本が裁かれた。

九条を守る運動と同時に「無防備地区」への取り組み

じゃあ、今、そういうのがあるかというところはありますね。もつと進んだ形で存在しています。この「国際条約集」に「無防備地区」というのがちゃんと書いてあります。

実はこれ、日本で二十カ所ぐらいやっていますけれど、皆さ

んもご存知だと思います。これは日本国も署名いたしました。「国際的武力紛争の犠牲者の保護に関する追加議定書」。ふつう「ジュネーヴ条約第1追加議定書」（国際武力紛争）と書いてあります。図書館に行つて、コピーでもしてもらっていただければどなたも手に入ります。ずいぶん長い法律、国際法ですけど。

日本国がこれを批准したのは、実は二〇〇五年ですね。一昨年ですよ。これの効力が発効したのは一九七八年です。つまり第一追加議定書というのが国際的に発効したのが一九七八年なのに、日本国はなんだかんだと言って認めなかったのです。国会が批准しなかったのです。やつと二〇〇五年の二月二十八日に国会がこれを承認して、日本も当事国になったわけです。今、一六七カ国、国連加盟国の五分の四ぐらい、ほとんどの国がこれに参加しています。

無防備地区の四つの条件

その中の第五十九条に、無防備地区というさつき言った無防備都市から少し進んで、法Iにも綿密になってきています。

まず第五十九条、ちょっと読んでみます。そう長くはありません。紛争当事国が無防備地区を攻撃することは手段の如何を問わず禁止すると、こう書いてあります。

紛争当事国というのは、例えば日本と、どこでしょうね、そ

ういう仮定はあまりしたくないのですが、もう一度、アメリカと戦争をしたとします。そのときに、紛争当事国はアメリカ合衆国と日本ということになります。お互いに無防備地区の宣言をした都市がアメリカの中にあつたり、ロサンゼルスがそうだったたり、それから日本の横須賀がそうであつたり、横須賀がそうなるわけではないのですが、そうするとお互いに無防備地区の宣言をしたところを攻撃するのは、これは禁止です。国際法廷というのがあつて、今、その力は弱いのですけれども、しかしこれは国連も出てくると思います。禁止すると国際条約で決まっています。

じゃあ、無防備地区の条件は何かといいますと、これが4つあります。第1番目は、すべての戦闘員が撤退しており並びに移動可能な兵器及び軍事設備が撤去されていることです。ですからそこにいた兵隊さんもなく、そこに置いてある移動式の武器も全部そこから撤去されていることです。所沢市は可能性ありますよ。市長さんがわざわざこの集会にメッセージをくれていますし、今のうちっていう感じがしますよね。やり方を、僕調べてきましたから皆さんに申し上げます。

第2番目は、固定された軍事基地が敵対的な目的で使われない、ということ。固定された軍事基地があつてそれを移すのが面倒な場合、そこに網をかけるとか、その軍事的な機能を一時ストップさせるわけです。

3番目は、そこに警察はいいんです。所沢警察署がそこにありますけれども、あれはいいのです。第3番目は、当局又は住民たちが武器を持って敵を攻撃する、それはだめ。つまり市民が俺たちもやらないよ、というのが大事。

第4番目は、軍事行動を支援する活動が行われないこと。それから固定された軍用施設があつたら、それを市民の手で封印する。話し合いかなんかで。それから移動させられるものは一旦全部、兵隊さんも高射砲も飛行機も全部、無防備地区から追い出せる。

この四つの条件があれば、有権者の五十分の一の署名を1ヶ月で集め、それを市議会に出すわけです。市の議会で駄目になればそれでおしまいですけれども、市議会でも市長さんがうんといわなければ駄目です。これ両建てになつていのですね。ですから今の市長さん、こういう会にメッセージを送るくらいですから、相当分っている人だと仮定して、今度議会を勝たせるようにしなければいけないわけです。市長さんがうんといえるような、そういう答えを出せるような議会にしておかなければ駄目なのです。

こういう事がちゃんとできれば、市長さんが最終的に所沢市は無防備地区ですと、国際的に宣言するわけです。

そうすると、なんか国民の三分の一ぐらいが北朝鮮のテポド

ンを恐れていますよね、それから中国といつかはやらなければならぬ、馬鹿なことを考えている人もいないわけでもないのですけれど、所沢市がそういう宣言をして、さつきいった四つの条件を満たして署名を集めて、議会と市長さんがうんといえ、この所沢市は無防備地区という国際的な、まったく攻撃もされないところになるわけです。

藤沢市はかなり早いときからやっているのですが、無防備地区ってなんだろうと思っていたのですが、たとえば今僕が住んでいるのは鎌倉市ですけど、藤沢・鎌倉がもし無防備地区になったら横須賀が孤立するわけですよ。本当は横須賀の人がやってくれるといいのですけどね。横須賀の有権者の五十分の一ですから。ところがあそこに小泉という訳の分らない人がいますからね。

はっきり言うと日本をアメリカに本気で売り渡した人がいますので、これは本当に横須賀でやって欲しいのですけれども難しい。だから横須賀を無防備地区で囲んじゃおう、という作戦を、やっと、一昨日ぐらいから立て始めました。

今日この集會が終わったら、九条の會は勉強をするとか、みんなで氣勢をあげ楽しくやるとか、覚悟をあらたにするとか、こうしたことは大事な集まりであって、その中からまた有志が集まって、今度は無防備地区の活動をしよう準備を始める。

それで鎌倉と藤沢あたりが横須賀基地を囲んで無防備地区にする。もし、どこかの国が横須賀を攻撃するつもりが、ずれて鎌倉へでもきたらどうする。攻撃されたり、爆弾落とされたりしたらどうする、だからこっちも爆弾持たなければという人がいますけれども、持っても持たなくても向こうで爆発させればやられるわけです。

そんな錢を使って、そんな事をするより、無防備地区にするほうがずっといいと思うんですけれどもね。

向こうが核兵器を持っているのだから、こっちも核兵器を持たないと、とすぐ言います。こっちが持っても持たなくても向こうが攻めてくれば、持っていないでも死んじゃいますし、持たなくても死んじゃう。だから向こうを撃たせないようにすればいいでしょう。

ちよつと馬鹿な話をしますと、十九世紀のイギリスは世界の工場といわれていたのです。早く産業革命をやって機関車でもなんでもどんどん作って、世界中が軍艦でも機関車でも何でもイギリスに注文した。だから世界の工場といわれていて、後半は世界の銀行といわれ始めました。

常に世界の何とかというのがあります。今、アメリカは世界の警察官と、これ自分で言っています。と、いうふうになりたかったけれども、なれないでしょう。もうだつてドルがこん

なに弱くなっています。

異常に低い食糧自給率、輸入物にたよる日本

今度、WTOという、昔、ウルグアイ・ラウンドってありましたが、新しいラウンドが始まっているのですけれどね。これはアメリカが自分のところの農作物とか機械とかをうんと便利に売りつけようと、また何かラウンドで変えようとしているのですが、今回はうまくいかないですね。ヨーロッパ共同体、EUが徹底的にアメリカと対決しているのです。

だからもうアメリカの独裁は終わったのかもしれませんが。ドルとユーロを見ていて、それからそういうWTOの何ラウンドといいましたっけ、もうウルグアイ・ラウンドはさんざんやって、日本の皆さんが「国際化もいいじゃない！」とかね、「国際化さんせい！」というので僕、本を2冊も書いたのですが、それでも、結局負けちゃったですよ。

現在どうなっているかというところ、所沢も農家の方がいらつしやると思うのですが、今、農家の一時間の時給はいくらだと思えますか？ 二五六円ですよ、一時間。一生懸命働いて、米を作っている、その一時間の時給が二五六円。東京でマクドナルドの高校生のバイトが、この間新聞に出ていましたが、時給七五〇円ですよ。ルーズソックスの女学生が遊ぶ金か何かもつと真面目な動機もあるでしょうけれど、マニュアルか何かを見て働いて

いる人たちと、三十年米を作ってきている人たちの時給を比べると、女学生のほうが3倍も高いのですよ。

今はもう一年に七万戸ずつ農家がなくなっています。それで今一八七万戸が残っています。これを七でわりますと二十三、四年後には農家はもう一軒もなくなっちゃうのです。

でも、そうはならないと思います。今度は農地法を変えて、スカイラークとか外食産業が田圃を買うという法律が来年通りそうですから、日本の田圃をああいいうところが買うでしょう。それで結局そこにいた農民は、その会社の小作人になるのです。なんていうことはない戦前に戻っちゃうのです。

今、農業を支えている農業就業者の四十五%が七十歳以上です。後継者は、去年は五十三人とか。それはウルグアイ・ラウンドでアメリカの要求を全部入れたせいです。そして今、これだけ減反をしろ、減反をしろといわれて四分の一ぐらい減反されているにもかかわらず、政府は毎年八十トンぐらい買っているわけです。ですから米の値段は安くなります。ウルグアイ・ラウンドのとき、僕はそれを一生懸命言っていたのですけれど、誰も聞いてくれなかったのですよ。

もちろん車を買ってもらったり、テレビを買ってもらったり、半導体を買ってもらったりする代わりに、やっぱり買ってもらったところから米をあるいは農産物を買うということは大事で

しようけれども、たった一つ自給可能な穀物は米しかありません。大豆は、自給率四%ですよ。小麦は十二%か十三%です。ですから一億二〇〇〇万人の人口の九〇〇〇万人ちかくは全部、輸入物を食べているわけです。

これは僕から見るとちょっと危ういという感じがしますけれども、それはさておいて、そういう新しい、アメリカの都合のいいラウンドを今やっている最中で、日本も参加しています。また、アメリカのいいなりになっているみたいですが、EUだけは違うんですね。強硬に反対して、今、難航しています。だからウルグアイ・ラウンドのときと今とは、アメリカの国力はずいぶん違ってきて、落ちてきていますよね。

そういうことを考えても、しかもイラクに給油艦を出したり、それもチェイニーとライスさんから買っているようなものでしょう。しかも市価の3倍ぐらいで。それをただで上げて、この間の税金はどうするのっていう、そんな人が国を守れますか？ 私たちを守ってくれると思いますか？

じゃあ、自分で守るためにはやはり具体的にはこの無防備地区というのは、九条の会の広がりもこのまま大事にしながら、うんと広げていく。日本中あちこちの都市が無防備地区になっってしまったほうが早いんじゃないかな、と。つまり「する」の方に、積極的な平和主義の方へ切り替える。

憲法がせつかく南半球や宇宙空間に法的な平和を作り出してくれているのに、傍観していないで、われわれも動きましよう。否定じゃなくて、なんとか「する」という方向へ動こう。じゃ、とりあえず、無防備地区をやってみよう。と、というのが、現在の心境です。

皆さんに別に勧めに来たわけじゃないのです。どうも守っているうちに気がつく軍事大国になったりしていますから、こっちもなんかやっついていかないと、もう憲法だけに任せておくわけにはいかない。その憲法も一気に・・・、国民投票法が出来てしまっていますから。あれ、いんちきな法律なんですけれどもね。

結局、郵政選挙で小泉さんに勝たせてしまったので、争点はあれだけだったのに、あの後ばかばかつといろいろなことを決めちゃったでしょ。安倍さんという人は意外とスグレていた人だったと、やることやってしまったのです。僕、最初は馬鹿にしていたのですね。あれは嫌なやり手だったなあと思いますよ。だから「安倍晋三、馬鹿！」なんていつているわけには行かないんです。あの人、あつという間に、小泉さんから譲られた瞬間に、郵政選挙で得た勢力でばかばかつとやってしまったのですからね。これは国民は迂闊でした。気がついて参議院でNOを出したのですけれども、もう投票法は決まっちゃいましたから、いつ出て来るか分かりません。やはりもう住んでいるそれぞれの地元で、そういう運動を前へ向かって「する」とい

う方向へ、こっちでは「九条を守れー！」と頑張る。しかし、今度は「これするー！」という、その二つでやっていったらどうかと考えました。「無防備地区」は札幌でもやっていますよね。藤沢もやっています。都内でも区の単位でやっています。

物理学のネットワーク理論を運動にとり込む

物理学で6次の繋がりという理論があります。つまり六十五億の人間がこの地球上にいますけれど、間に六人の人を介すると全部知り合いになるといふ説ですね。物理学のネットワーク理論といいます。

僕は一度天皇ご夫妻に会ったことがあるんです。会った瞬間に「ご」を付けてしまったのですけれどもね。

そうすると皆さんは僕を介して天皇と知り合っているわけです。それでもし、皆さんが天皇と会ったときに、「井上ひさしさんって知っていますよ?」「あ、一度会ったことがあります」「私も知っていますよ」、こうなると、ここで皆さんは僕を挟んで知り合いになる。

で、天皇は例えばシラク大統領とか、この前、プロードというイタリアの首相と会ったのですけれども、そうすると僕と天皇を介して皆さんはイタリアの首相とかフランスのシラク大統領と、間に三人を置いてもう知り合っているんです。

これウイルスが広がるのと同じ形なのです。それから脳の動きもそうらしいのです。つまりこの脳も一〇〇億とか何とかという脳細胞がたくさんあって、これどうやるのだろうかと思っ

たら、結局、脳神経を6つぐらいへだてると実は全部に行き渡る。飛んでいく形が、肝心のところが死んでしまったりすると、つまり物忘れになるのです。そこで別のつながりを探すわけです。「えーっとあれは、えーっと」と、で、ぱっとつながると「そう、あの人よ」というふうになるわけですよ。

それは物理学から始まった発見ですけれども、脳も人のつながりもそれからインターネットもすべて、この6次の繋がりというのですけれども、六つぐらい飛んで行くと実は全部とつながるといふ、そうでなければ脳細胞がチェンジしながらいろいろなことをやれるわけがないということを見つけた人がいて、今はその理論が強くなっているのです。

同時にクラスターという考えと一緒に生まれます。クラスターというのはぶどうの房ですよ。アメリカが落としているクラスター爆弾というのは、爆弾の中にぶどうの房みたいに子爆弾がたくさんあって、しかもそれは不発弾になって地雷になっていく。子どもたちがひよつと持つと爆発するという、とんでもないものです。しかも殺さないのです。殺してしまうとそこで、ああ、不幸なことだ、アメリカの爆弾に殺された、ということになる。半殺しにするのです。

そうしますとその人はあの恐怖をずっと死ぬまで覚えているわけです。死ぬまで脅えるわけです。手向かうとこうなるといふことだけ覚えていく。もし、死んでしまおうと仇をとろうなん

ていう人が出てきますので、その人がお前もこうなるぞというように、半殺しにしてしまう。そういう子爆弾が一杯入っているクラスターという爆弾があります。こういうったクラスターという考えも実は、ネットワークと同時に必要なのです。

とんとん飛んで行くだけだとなんだか分らなくなる。俺は世界中ずつと知り合っているといつても何の意味もない。確かに知り合っているかも知れないけれども、それがどうしたつていわれます。

まず、それぞれが自分の足元に、枝といういい方をします、枝を出していくのです。所沢の方が、よし無防備地区の見学に行こうと札幌に行ったり、そこで知り合ったり、それから藤沢に行つて知り合ったりしながらも、今度はぶどうの房のように地元で枝を出し合つて、いろいろな人が互いに枝を出し合つてそこに房ができないとだめで、その上でいろいろと飛んでいく。6次、6回、飛んでいくとほとんど世界の人が知り合いになるというか、全部に届く。

この理論を無防備地区という運動に取り込もうと。実は「九条の会」もそうですよね。2年で7000に達しようという勢いです。これがもし、福田さんは忘れたふりをしていますけれども、これが安倍さんと同じような強硬な人なら「9条の会」はもっと増えていると思います。今ちよつと油断して、油断じゃないですね、ホツとしているところですね。安倍晋三がいなくなつ

てとりあえずホツとしているところなのですが、いつ改正が提起されるか、法律がもうすでにありますから。

だからクラスターのように、ぶどうの房のように地元を固めながら、いろいろな人へ飛んで行くということも同時にやっていく。それがどうも人間の脳の働きとか、人のつながりとか、すべて重なっているなという、ある直感があります。

まあ、たいしたことを考えていなかったと、いま分つたのですけれども。意気込んで、「守る」だけではだめだ、「する」方に行かなくてはというので、さんざん一昨日まで一生懸命になつて考えたのですけれども、考えた結果は後半の、今お話ししたところです。

最後に一言だけ

どうも私たちは、言葉がみんなつるつるしているのですよね。これは昔からそうです。日清戦争のときも、清国膺懲（ようちよう）という、懲らしめて征伐する。ロシアのときもそうですよね。中国のときもそうです。何か征伐して懲らしめるというのが膺・懲という漢字二文字に入っていて、それはいつも使われてきた。怪しからん、あいつらを懲らしめようという。

今、北朝鮮にむかつて日本人はそういう方向で動いていますよね。怪しからん、ちよつと懲らしめてやりたい。確かに拉致

された方、それから拉致家族の方は、それはもう絶対日本政府もわれわれもそういうひどいことを許さないという態度と同時に、今度はやはり歴史的に飛んで行かないと駄目なのですよ。

やはり6次で飛んで行くと、僕らが子どもの頃、何で周りにたくさん朝鮮半島の人たちがいたのだろう、と。話に聞くと、あるいは学者が調べると、町を歩いている時、それから畑で仕事をしている時にいきなり朝鮮人のお巡りさんと日本の企業の人狩りが一緒になって、いきなり「お前来い！」と喋っていきなりトラックに積んで、日本に連れられてきた。日本の若い人たちが戦争に出かけて鉱山でも工場でも人手が足りない。

あの広島でも、三菱重工などで七万人の朝鮮人が働いていたのです。その三菱重工の人買いの人たちが地元の警察と一緒にあって、もう、いきなり、こつそりじやないのですね、堂々と拉致してきたのです。しかも私たちは六十二年経ってもまだ在日という言葉を使っています。一緒に暮らしてきたんですよ。

どうも物理学から生理学まで、6次の繋がりとというのが科学の世界で今、大トピックスなんです。

私たちも地元でしつかりやりながら、地元でやったことをあーるいは他でやっていることをお互いに飛んでいって交換して、しかも国境を超えて、無防備地区は世界中で作っていますから、そこへ飛んでいくとか、兄弟無防備地区なんていうのを作った

りしながら、そうやって行くしかもうあの馬鹿な人たち、七〇〇人ぐらいがどうも世界を動かしているようですから、この人たちに對抗するには無数の6次のつながりでつながった有志たちしかないなと思っています。

もう少し考えを深めて、それから実際に鎌倉で活動をしてみて、また次の機会がありましたらその報告をします。所沢はどうも可能性がありますよ。今の市長さんが健在なうちに、議会議え固めれば。所沢がなったら面白いですよ。

鎌倉は簡単ですよ、何も無いですから。すぐなれると思えますけれども。横須賀とか、そういうところがポイントですね。三沢とか、旭川とかですね。

そういうところがそうなるまで三十年ぐらいかかるかもしれませんが、とにかく自分の代はだめですから、子どもの代、孫の代のために。僕も高1の息子がいて学校に通っています。横須賀へ艇入れしようと、でも、横須賀で頑張っている人も多いのですよ。少し地元でやってみようと思います。そしてそこで何かうまいことがあったら、また報告に参ります。

芝居は時々お世話になります。ありがとうございます。芝居のほうは、絶対に入場料が損したなと思われないうなもの、一生懸命作っていますので、これからもよろしくお願いいたします。「こまつ座」を守れとは絶対言いません。それはどうでも

いいのです。九条の方がもつともっと大事ですから。また一緒に気長に、しかし今度は前へ、「する」という方向へ、お互いに半歩でも進むようにしたいですよ。

これからお互いに、頑張りましょうというのはちよつとおざなりですね。この、ずっと跳ねながらつながり合いましょう。どうもありがとうございます。

「井上ひさし講演を成功させる会」

代 表 浜林正夫（一橋大学名誉教授・九条の会ところざわ）
事務局長 嶋川孝司（マスコミ・文化 九条の会 所沢）

「会」を協同して推進した所沢市内の「九条の会」

さんとめ九条の会
しんとこ九条の会
九条の会ところざわ
所沢建設九条の会
マスコミ・文化九条の会所沢
松井九条の会
なみき・こぶし九条の会
三ヶ島九条の会